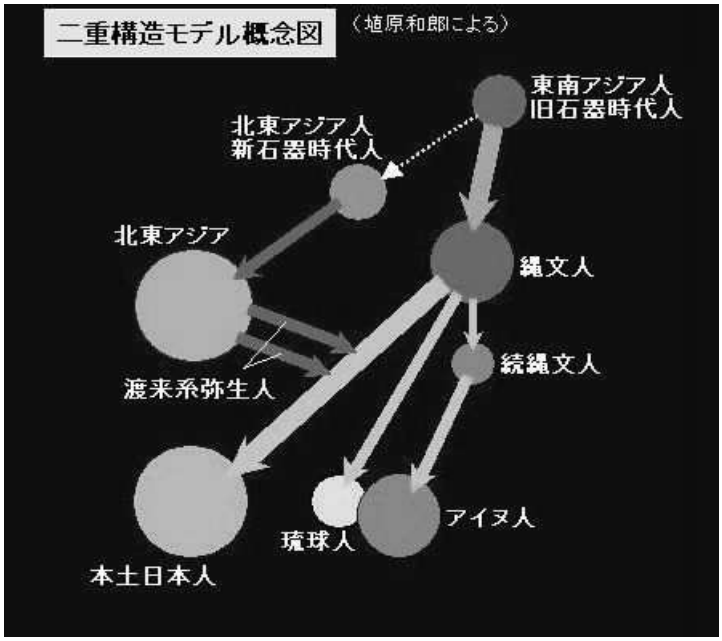
事務局 amateur スタッフによる

フォロー・アップ メモ・ランダム



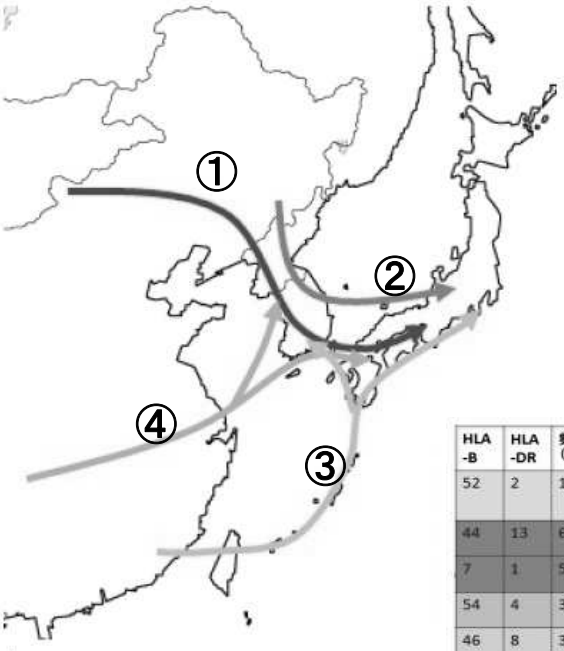
右の図は講義でも説明のあった埴原和郎氏が考える日本人形成史の概念図であり、日本人集団の主な構成要素を縄文系と渡来系の二つと考えることから「二重構造モデル」と呼ばれているものです。

埴原氏によると、旧石器時代人は、東南アジア（スンダランド）に棲んでいた古いタイプのアジア人集団をルーツに持っていて、それに続く縄文人は日本列島の温暖な気候に育まれて独特な文化を熟成させ、混血など他の集団の影響を受けず、純粋な集団として小進化をしたとしています。一方、地球が冷涼化するにつれて北東アジアの集団が南下し、日本にも渡来して来ました。この渡来は弥生時代になって急に増加し以後7世紀まで続いたと考えられています。

HLAハプロタイプ

ウイルスなどの感染を受けて変化した細胞を、正常な細胞と区別して排除するための「目印」として使われる分子グループをHLAと呼んでいます。HLAの遺伝子群は特定の対立遺伝子がセットを組んで親から子へと伝えられていき、このHLA遺伝子セットを「ハプロタイプ」と呼びます。ハプロタイプは個人差だけでなく、著しい集団差があることでも知られています。また、「保存性がいい」標識でもあることから先祖集団の共通性（故郷）などを判断できます。 臓器移植などの適合性を判定するために多くの現代人のHLAハプロタイプを分析したデータや、遺跡から出土した人骨などを分析したデータを照合することによって、「二重構造モデル」では弥生時代以降に一つと考えていた新しい渡来人の波を、第2波と第3波の二つに分けた「三段階渡来モデル」も検討されているそうです。

日本人に多いハプロタイプは弥生時代以後に渡来した可能性が高いと推定されています。最も多い北九州から本州の西部や中央部にかけて多いハプロタイプは、中国北部の漢民族や韓国人にもあるタイプで、さらにモンゴル人に多いハプロタイプである可能性が高いのに対し、シベリアのヤクートやバイカル湖のほとりのブリアートにおいては殆ど見出されていません。二番目に多いハプロタイプは、北陸地方から秋田にかけて多く、また近畿や東海地方でも多いですが、対照的に東北地方の太平洋側や南九州、四国、沖縄では少ない傾向にあります。韓国人では高頻度で見出されるタイプであり、また中国東北地方の満族にもかなりの頻度で見られているにもかかわらず中国北部の漢民族やモンゴル人では殆ど見られません。このようにハプロタイプを比較することによって、大きく次の4つの流れが認められるようです。



HLA-B	HLA-DR	頻度（%）	国内（濃い地域）	国外
52	2	10.0	北九州・本州中央部	華北：4.2% 韓国1.8% モンゴル：5.9%？
44	13	6.3	日本海側	韓国：7.0%（最多） 満族
7	1	5.3	日本海側	韓国：2.6% 満族
54	4	3.7	太平洋側	韓国：4.4% 中国南部4.4%
46	8	3.6		韓国：4.4%、満族 （類似B46-DR9 ：中国南部、タイ、ベトナムなど最多）

1. 中国大陸北部から朝鮮半島を経て北九州・近畿へ（赤）

2. 満州・朝鮮半島東部から日本海沿岸へ （青）

3. 中国南部から琉球諸島を経て太平洋側へ（オレンジ）

4. 中国大陸南部から直接、あるいは朝鮮半島を経由して北九州へ（緑）

TV放映もされた「3万年前の航海徹底再現プロジェクト」などでは南方ルートの探求が盛んのようですが、北日本の分析も進め縄文人との関わりも明らかにしてほしいものです。

ところで、青谷上寺地遺跡からは大量の人骨が見つかり、全国的に注目されました。鳥取県埋蔵文化財センターでは国立歴史民俗博物館等から依頼を受けて約40点の人骨試料を提供しミトコンドリアDNA分析を進めてきました。その結果ほとんどの人骨のDNAの特徴が中国や朝鮮半島の人のものと共通していることが分かり、1世紀から2世紀の弥生時代後期になって新たに大陸から渡来した人々だった可能性のあることが分かりました。弥生時代後期は、縄文系の人々との交わりもある程度進んでいたと考えられる時期ですが、縄文系の特徴はみられないようです。卓越した木工技術を擁し、古墳時代に入るまで集落として存続している青谷上寺地ですが、出土人骨は彼らの祖先でしょうか。それとも彼らに襲いかかった渡来人だったのでしょうか。

※ 古代史（弥生時代～飛鳥時代）に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論　大募集　（体裁は自由ですが、文書でお願いします）